

鵜祭

前

ワキ 官人

シテ 海人乙女

ツレ 同

後

ツレ 八尋玉殿の神

シテ 気多明神

地は 能登

季は 十一月

「御影曇らで君守る。く。神の宮居に参らん。

「そもそも是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても能州氣多の明神は。靈神にて御座候。御神事の数々多き中に。霜月初午の御祭礼の儀式君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ見て参れとの宣旨を蒙り。唯今能州に下向仕り候。

「思ひ立つ。其方の空も北時雨。く。降り来る嶺やあらち山。雪の木の芽の山越えて。越の長浜遙々

と。行方につく松原の。影見えそめて程もなく。一の宮にも着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。是は早能州一の宮に着きて候。あら笑止や。俄に雪の降り来りて候。是なる松陰に立ち寄り。雪を晴らさばやと存じ候。

「降る雪の。簑代衣袖さえて。春待ちわぶる心かな。ツレ「冬立つ波の音までも。

「浦さびまさる夕べかな。

シテ「それ国々所々に。神所垂跡多けれども。殊更御影を仰ぐなる。」

二人「此神垣の松の葉の。千代万代の末かけて。運ぶ歩みも積る雪の。深き恵みを頼むなり。我は賤しき海士の子の。よその見る目も如何ならん。誰とても隔てはあらじ神心。く。交はる塵の浮世に。安く楽しむ身の程を。思ひかへせば勇み有る。此神祭急ぐなり。く。」

ワキ詞「如何に是なる人々に尋ね申すべき事の候。」

シテ詞「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。」

ワキ「是程深き雪の中に。しかも女性の御身として。かやうに歩みを運び給ふ事不審にこそ候へ。」

シテ「是は此あたりの者にて候ふが。霜月初午の御祭礼の儀式。殊更神秘多けれども。取り分け歩みを運び候。是は此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり。若し都より御参詣候ふやらん。」

ワキ「実によく見て有る物かな。是は当今に仕へ奉る臣
下にて候。今月初午の御祭礼の儀式。君聞し召し
及ばせ給ひ。急ぎ見て参れとの宣旨を蒙り。勅使
に下向仕りて候。

シテ「さては遙々の御志。返すぐも有難うこそ候へ。

ワキ「さらば御神事の謂委しく御物語り候へ。

シテ「是れ猶秘する事なれば。あからさまには申し難し
さりながら。当国ゆのかうと申す所より。荒鶉を

取りて生贄に供ふ。彼鶉みづから贄に備はり。放
せばやがて飛び去る事。是第一の奇特なり。

ワキ「是は不思議の御事かな。さも心なき鳥類までも。

シテ「贄に備はる神の誓ひ。

ワキ「雲井を翔る翅までも。心なしとはいひ難し。

シテ「ましてやいはん人として。

ワキ「頼みをかけよ。

シテ「かけまくも。

地「かたじけなしや神の代の。尽きぬ御恵み。ひとへに仰ぎ給へや。」

地クリ「そもく当社の地形を見るに。西は蒼海漫々たり。北には青山あり。亀鶴蓬萊山と名づく。一つの巖窟あり。七星常住の仙境なり。」

シテサシ「然るに此神は。垂跡年久しといへども。利物の風あらたなり。」

地「日本第三の社壇。正一位勲一等。氣多不思議智満

大菩薩と号し。無仏世界度衆生。今世後世能引導の。誓ひを顕はしおはします。

クセ「然るに其昔。神功皇后の勅を受け。干満両顆の明珠を。海底に沈め忽ちに。新羅百済の凶賊を。皆悉く亡ぼして。天下安全に。国土も豊かなりけり。そのかみ垂仁天皇の御宇かとよ。大入杵の神主。祭主と定め此神を。勧請し奉りけり。」

シテ「然れば代々の帝までも。」

地

「神徳を仰ぎ給ひ。社祿を贈り。礼典ひまなくあがめ給ふとか。されば一度も神前に。歩みを運ぶともがらは。息災延命の徳を得。二世の願ひも満つ月の。影明らかに曇りなき。当宮の御恵み。仰ぎても余りあるべし。

ワキ詞

「不思議なりとよ方々は。そも誰なればかほどまで。神秘を残さず語り給ふ。其名は如何におぼつかな。

シテ

「今は何をか包むべき。我此所に年を経て。有縁の

衆生を守るなる。

地

「神とやいはん恥かしや。く。御身は勅の使なれば。言葉をかはすぞと。夕べの月の光と共に。朱

の玉垣に隠れけり。玉垣の内に隠れけり。(中入)

ツレ一声

「昔は大入杵の神主と号し。今は此地に跡を垂れ。八尋玉殿の神とは我事なり。

地

「即ち御影を顕はし給ひて。即ち御影をあらはし給ひて。勅使に参拝の膝を屈し。其後御殿に上らせ

給ひ。手づから扉をひらき給へば。誠に妙なる相好莊嚴赫奕として。顕はれ給ふ有難や。

シテ「如何に八尋玉殿の神。いざ諸共に舞樂を奏し。彼客人を慰めん。

ツレ「実に客人は勅の使。さらば舞樂をなすべしと。琴管の役をすゝむれば。

シテ「誠に勅の使ぞと。聞くに付けても思ひ出づる。

地「其古への神祭。く。安倍の貞任勅使として。万

歳樂を舞ひし事。唯今の勅の使に。思ひ出づるも

面白や。(舞)

シテ「更け過ぐる夜神樂の。

地「更け過ぐる夜神樂の。月も傾く空なれや。丑三つも時至れば。神前に供ふる生贄の。真鳥もこゝに顕はれたり。空飛ぶ鳥も地に落ちて。く。神慮に従ふその有様。まのあたりなる奇特かな。

シテ「此鳥少しも驚かで。

地

「此鳥少しも驚かで。諸人の中を。静かに歩み出で
階を上り。神前に羽を垂れ伏しけるが。又立ち歸
り庭上に下れば。神体ともに立ち出で給ひ。汝よ
く聞け。此度贅に供ふる結縁に。鳥類の身を転じ
仏果に至れと。宣命をふくめ給ひければ。八尋立
ち寄り彼鳥を抱き。海上に向ひて放ち給へば。此
鳥悦び羽風を立て、雲井に翔り。飛び廻りく遥
かの沖に飛び去りぬ。実に有難き和光の神徳。実

にありがたき神徳を見せて。神は上らせ給ひけり。